

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

西欧で起こった産業革命以降、現在に至るまで、人類は天然ガスや石油などの地球資源を大量に消費し続けてきた。地球資源を用いてモノを生産し、経済活動を行う人類の生活圏を、筆者は「人間圏」と名づけ、環境問題を捉え直そうとした。次の文章は、これから人類はどのように環境問題と向き合うべきなのかを考察している文章である。

ものごとの考え方としていちばん問題だと思ふことは、やはり※人間圏をつくって生きたり始めたときから、われわれは地球を所有していると思ひ込んでしまったことです。とくに※物質循環をコントロールするようになってから、地球はわれわれのものだという感覚が基本になってしまいました。その最たるものが国家という概念です。近代国家というのは陸上を線で区切って、ここが日本なら日本だ、中国なら中国だというような大地の所有をしているわけです。もともとはそんなことはありません。誰のものでもありません。そういうことを考えてみてもわかるように、われわれは地球に対して所有感覚を持ってしまっているのです。

自分の体についても同じことがいえます。みなさん、自分の体は自分のものだと思っていますね。自分の体なんだから、自由勝手にしていいたいと思っているわけです。ところが死んでしまえば、元素的な意味で、地球に戻ります。人口の増減によって、その体重のぶんだけ地球が重くなったり軽くなったりすることはありません。ということは、モノとして考えれば、体だつてもともと地球のものなのです。

このように考えてみると、じつはわれわれにとって重要なのは、モノではなくてその機能なのだということに気がきます。心臓であるとか肝臓であるとか、脳であるとか、身体を構成するそれぞれの臓器の機能を使って、われわれという身体やその活動を維持しているわけです。身体や臓器という物体ではなくて、各臓器の機能と、それらが全体として関連しあい、ひとつの安定状態を維持するということが重要なわけですね。

**A** なぜか、われわれはモノとして所有することにこだわるわけです。自分の欲望を、モノを所有することで満たそうとしているのです。1これはよくよく考えてみるとおかしいことですね。国家という問題を考えても、自分の体という問題を考えても、われわれが人間圏をつくって生きていなければきつと所有という感覚はないはずで、人間圏をつくって以来、特に※ストック依存型人間圏になって以来、われわれがたまたまそう思ひこんでやっているだけのことです。結局、地球やモノを所有しているというその発想がおかしいということですね。

重要なことは機能を利用しているということ、このことはじつはモノとしてはレンタルしているということを示唆します。「モノとしては借りているのだけど、その機能を利用している」というふうに考えることが重要なことです。人間圏の未来を考える時に、したがって「レンタルの思想」という考え方がこれからは重要だろうと私は考えます。すべて借り物なのだと思ひ暮らしていけば、時間を速めて物質的豊かさを手にしている※2云々の問題解決も、後からついてくるのではないかと思います。

このように考えると、われわれが生産活動をやつて何か製品をつくつても、重要なのは製品の所有ではありません。製品を、本当は所有する必要はないのです。2レンタルでいいのです。本屋さんには怒られるかもしれませんが、たとえば私が子どものころは、本は貸し本屋で借りて読むものでした。戦後すぐでまだ十分に本が3シソッパンされておらず、そうそう買えるものではなかつたので、貸し本屋という商売が残つていたのです。自転車もそうです。貸し自転車を借りて遊んでいました。借りてすむものは借りるというのが、ふつうだつたのです。

それが、世の中が物質的に豊かになると、何でも個人で所有することが豊かさだと思ふようになります。だから高度経済成長期になると、貸し本屋や貸し自転車屋というようなものは、たちどころに消えていきました。一人ひとりが、何でもぜんぶ所有するというふうになってしまいました。現在の環境問題に至るすべてのものの考え方の4アヤマリは3そこにあるのです。

「レンタルの思想」というのは、ある意味で資本主義という制度の考え方とは矛盾します。資本主義というのは個人の欲望を刺激するうえに成立しています。モノを買おうという個人個人の欲望を拡大するから発展するのであつて、みんなが節約をしたり借り物で済ますようになったら、いまの資本主義が成り立たないのは自明です。

4勘違ひしないでいただきたいのですが、私は資本主義がよくないと言つてゐるわけではありません。これも生き方に対する考え方の問題です。もともと資本主義がイギリスで成立するとき、やはり倫理的な問題が5シソッパンされました。まさに「金があれば何でもできる」と思ふような人間が出てこないようにするにはどうしたらいいかという議論があつたのです。**B**、「何のために儲けるのか？」を考えたのです。金があれば何でも買えるからそのために儲ける、というのではなかつたのです。儲けて、その金で何がしたいのかを問うたわけです。これは結局、何のた

めにわれわれは人間圏をつくったのか、を考えようとしたということです。われわれは意識していないかもしれませんが、豊かになると必ず余裕の出た部分を、文化や※学術などに使うようになります。C 豊かになれば、文化や学術は発展します。じつはそれが、「儲ける」ということの重要なゴールのひとつなのです。

「われわれとは何ぞや」と問うときに、やはり「自然とは何ぞや」「文明とは何ぞや」「歴史とは何ぞや」ということなどを、ぜんぶひつくるめて考えなければ答えは出ません。衣食が足りる程豊かになるということは、そういう知的好奇心の解明に※投資ができるということなのです。投資したぶんだけ、われわれの全体的な知識が増え、また、一部は※フィードバックされてわれわれの生活がさらに豊かにもなります。

(松井孝典『われわれはどこへ行くのか?』より引用、一部改変)

### 語注

※人間圏	人類が生活している空間のこと。筆者は地球の空間を「物質圏」、「生物圏」、「人間圏」の三つのグループに分けて、それぞれが存在しているとする。
※物質循環	地球に存在するさまざまな物質が循環することで、地球環境を維持する仕組み。
※ストック依存型人間圏	世界中から運ばれてくる化石燃料や食料などの資源に依存するようになった人間の生活空間のこと。日本では明治時代以降の生活を指す。
※云々	「以下略」の意味。後に続く同じような内容を省略するときに使う。
※学術	学問と芸術のこと。
※投資	将来の利益を見込んでお金を先に払うこと。
※フィードバック	ある物事への反応や結果が返ってくること。

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に、漢字の読みをひらがなに直して答えなさい。

問二 空欄 A と C に入る語句を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度、使うことはできない)

ア そして      イ だから      ウ ところが      エ あるいは      オ つまり

問三 傍線部 1 「これはよくよく考えてみるとおかしこと」とあるが、なぜ筆者は「おかし」と考えるのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア モノの機能が全体として関連しあい、ひとつの安定状態を維持することが重要だから。
- イ 自分の欲望は、モノを所有していることで満たすことができると考えているから。
- ウ 国家という問題を考えると、モノが持つ機能が重要であるという発想はおかしいから。
- エ モノが持つ機能が重要であるにも関わらず、人は所有という感覚にこだわっているから。
- オ 地球やモノに対して、所有という感覚を持つことは、思いこみでしかないものだから。

問四 傍線部 2 「レンタルでいいのです」とあるが、なぜ筆者はそう考えるのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア モノの価値というのは、所有することではなく、機能を利用することに由来するものだから。
- イ レンタルという考え方でモノを扱って初めて備わっている機能を使いこなすことができるから。
- ウ レンタルという考え方を広めることで、モノを買わずに貧しい思いをする人が少なくなるから。
- エ 借りてすむものは借りるようにすることで、誰もが物質的豊かさを得られるようになるから。
- オ 資本主義という制度を今後変更するためには、所有という感覚をなくしていくべきだから。

問五 傍線部 3 「そこ」とあるが、これが指す内容は何か。「ふことを良しとする考え方」と続くように十字で本文から抜き出しなさい。

問六 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人の体をモノとして扱うのならば、体は自分のものではなく、地球のものだと考えることができるだろう。
- イ 全ては借り物であると考えて生活していくことは、人間圏の未来にとって重要なものとなるに違いない。
- ウ 世の中が豊かになる前は、「借りてすむものは借りる」という行動は、誰にとっても一般的なものだ。
- エ 「レンタルの思想」は、個人の欲望の拡大を必要としない資本主義と、相反する考え方と言っても良い。
- オ 世の中が物質的に豊かになると、知的好奇心による疑問を、人々は解き明かしたくなるものだ。

問七 次の例文の傍線部は敬語表現である。その使い方として、適当なものには○、不適当なものには×を答えなさい。

- ① 本日、家庭訪問で先生がこちらに参る予定です。
- ② ご予約されているお客様がいらっしやいました。
- ③ 先ほど、お送りいただいたメールを拝見しました。
- ④ 私の父がそちらに荷物をお持ちになります。
- ⑤ 今日はありがとうございます。次回はぜひ我が家にお越してください。

### 【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明治時代後期、当時の帝政ロシアと、日本が領有を争った土地サハリン(樺太)から、北海道へ半ば強制的に移住を強いられた樺太アイヌ(日本列島北部の先住民族)の青年、ヤヨマネクフとシシラトカがいた。ふたつの大国に呑み込まれて、滅びゆくアイヌに危機感を覚えた彼らは、和人(日本人)とともに世界初の偉業を成し遂げたアイヌとして、日本の中で確固たる地位を得ようとする。そのために、前人未踏の地であった南極点へ向かおうとする。そこで、※白瀬南極探検隊に犬の世話役と橇の御者(運転手)として志願した。ところが、様々な困難により、探検隊の白瀬隊長から「南極点は目指さない」と告げられる。以下は、その後、南極大陸へ再上陸した場面である。

南極。そこでは凍りついた光が、雪と氷に反射して溢れ続けていた。

「おはよう」

声が出た。すこし離れたところに、**A** 防寒着を着込んだ武田学術部長が、観測機器の木箱をいっぱいに広げて座っていた。細く温厚な顔は髭が伸び放題で、吐息が凍ってまとわりついていた。書き物をしていたらしく帳面と鉛筆を握っている。

武田の背後には小さな天幕がある。そこでは寄り添うように白瀬隊長と三井所衛生部長が眠っている。

今回、上陸適地の捜索中にシシラトカが氷の亀裂に落ちて死にかけ、同行の隊員に助けられるなどの困難はあったが南極への上陸には成功した。白瀬、武田、三井所、犬係二名と二台の犬橇、新たに調達された三十頭の犬が「極地突進隊」となり、南極の雪原を行けるところまで行くこととされた。

出発してから、今日で確か九日目だったか。昼夜のない世界で、時間でなく天候によって活動する日々を過ごすうちに、日数の感覚がなくなってしまった。「中略」

ぐうう、と獣の唸り声が聞こえた。犬たちはもう起きているらしい。

風力計を組み立て始めた武田に礼を言うと、ヤヨマネクフは雪を踏んで大股に歩く。橇に積まれた荷物から干魚を引張りだし、ちぎって放る。犬たちは※敏捷く駆け寄ってくる。騒ぎながら干魚のかけらを拾い、合間に雪を喰う。

「飯、まだかな」

シシラトカが眠そうな顔でやってきて、餌やりに参加する。

「元気だな、こいつら」

親友の犬係が、角ばった顔をほころばせた。

「まだまだ行けそうだ。さすが樺太の犬だ」

ヤヨマネクフも同感だった。まだまだ行ける。

犬たちに起こされたのか、天幕から白瀬が出てきた。

「快晴だな。どこにいても青空はありがたい」

「快活な声は、どこか白々しい。白瀬は「残念だな」と **B** 呟き、空をじっと見つめていた。

遅れて三井所が石油コンロを持って天幕から出てくると、白瀬は何から逃れるように **C** 動きはじめた。火を起し湯を沸かし、調味噌を投じて味噌汁を作る。

食事の間、誰も話さなかった。ただ味噌汁をすすり、ビスケットを※咀嚼する音だけが通り過ぎる。白瀬はいち早く食べ終えると、雪で洗った鍋で再び湯を沸かして茶を淹れた。茶を喫する間もやはり誰も話さなかった。

(略)

三井所がコップを置いて腰を上げ、隊長に向かって背筋を伸ばした。ヤヨマネクフとシシラトカも倣う。

「本日、明治四十五年(一九一二年)一月二十八日。我が隊の位置は南緯――」

白瀬は一度言いかけ、※逡巡するように口を閉ざした。無念を示すように目を雪原に落とす。少しの、だが長く感じる時間のあと、白瀬は目を上げた。

「位置は南緯八十度五分、西経百五十六度三十七分」

白瀬の顔は、**b** クジウに満ちている。隊員に見せる初めての表情だった。

「ここを、突進の最終地点とする。みな、ご苦労さまでした」

誰も、何も言えなかった。

わかっていただけだった。それでも皆、どこかで念願していた。行けるものなら南極点へ行きたいと。

「仕方がない」

シシトカが、ため息を混ぜて囁いた。

「武田さん」

2 努めて静かに、ヤヨマネクフは聞いた。

「南極点は、どちらの方角ですか」

武田はポケットからコンパスを取り出し、蓋を開けて覗き込んだ。

「だいたい、あっちだろうね。直線距離で千百キロほどだ」

学術部長が指差した先は、ただ平坦な雪原だった。

ヤヨマネクフは頷くと、橇の方へ歩いた。「おい」とシシトカの声を無視して、橇の積荷に手を掛ける。風が

※ 凪いだ南極の雪原は、それでも骨まで寒さが染みる。

一気に積荷を突き落とす。残った物は腕で※ 薙ぐように払う。D 盛大な音を立てて、橇は空っぽになる。手綱は手首に掛け回すと、橇の後端に回り込む。

「進め！」

c 手綱を鋭くしならせ、橇を押す。先導犬が吠え、続く犬たちは走り始める。犬と橇、そしてヤヨマネクフは一塊

になって加速して行く。橇に飛び乗ろうと雪を蹴る。

その時、体が横から突き飛ばされた。手綱を腕にd カラませたまま、ヤヨマネクフの体は雪の上を転がった。急な制動に先導犬が悲鳴をあげ、軽い橇はひっくり返る。

「何をしてる、どこへ行く気だ」

3 決まっている。南極点だ」ヤヨマネクフは叫んだ。

「このまま帰っても元のままだ。俺たちは無力を蔑まれ、憐れまれ、滅びると決めつけられる」

「そのために死んでもいいのか」

「構わない。でないとアイヌが滅びちまう」

ヤヨマネクフは断言した。

「ノルウェー隊でもイギリス隊でも誰でもいい。そいつらが一番乗りと思った南極点には、俺がいる。死にそうに凍えてるか、死んで凍ってる俺がな」

「先を越されてたらどうするんだ」

「挨拶してやるよ」

かみつくようにヤヨマネクフは答えた。

「先を越されても、世界で二番目か三番目に南極点に行ったら世界に認められるのはアイヌの俺だ。今、そこいらで諦めてる和人たちじゃない。だから俺は南極点へ行くんだ。死に絶えるか「立派な日本人」なんてのに溶かされちまう前に、島のアイヌがアイヌとして生きられる故郷を作るんだ」

「その故郷ってやつは、南極点にあるのか」

「行けば作れる」

言い終わる前に、右の頬にe ショウゲキが走った。思わずつぶった目を開ける間もなく、次は左の頬を思い切り打ち抜かれる。

4 いい加減にしろ、ヤヨマネクフ！」

シシトカが拳を幾度となく振り下ろす。

ヤヨマネクフは殴られながら鋭く両手を伸ばす。シシトカの襟元をつかみ、投げ捨てるように左に押し倒す。上体を起こして立ち上がると、シシトカが飛びかかって来た。揉み合う。なんとか引き剥がす。拳を振るう。また、振るわれる。

「俺は※ チコヒロの遺志を継ぐ。※ キサラスイとの約束を守る」

ヤヨマネクフは叫び、殴る。

「新しい故郷を作り、そこへ連れていく」

「死んでもか」

「そうだ、死んでもだ」

答えると同時にシシラトカの拳がもろに顎に入った。少年のころから何度も殴り合ってきたが、一番効いた。数歩よろめき、こらえきれずに雪の上に倒れてしまう。なんとか上体を起こすと、シシラトカは両手をE下げて突っ立っていた。

「ヤヨマネクフよ、なら聞くが―」

その声は殴り合いの直後と思えないほど、穏やかだった。

「誰かが死なないと作れないところで、誰が生きていけるんだ？」

雪を踏む音がする。

「チコピロー・アイヌは村を作るために死んだんじゃない。勘違いするな。それと」

シシラトカはしやがみこみ、ヤヨマネクフに顔を近づけた。

「誰のものであっても、誰がいてもいなくても、何がどうなっていくと、俺たちの故郷はあの島だ。※お前が連れて帰った息子の体の半分はキサラスイなんだから、約束は果たさせたんじゃないか」

「果たせた、かな」

漏れた声は、※つんつるてんの※紺を着ていたころのような細さだった。

「半分はな。おれはそう思うぜ、親友よ」

※石狩川の河原に立っているような顔で、シシラトカは頷いた。

「5. だからもう半分は、生きてやり抜け。のうのうと死んでる場合じゃねえぞ」

角ばった親友の顔を見て、ヤヨマネクフは気付いた。

いつか見た故郷、小さな※木幣、たなびいた煙。悲しい経緯ばかりだが、それらに突き動かされてこれまで生きてきた。親友に今、なお生きよと諭された。

生きるための熱の源は、人だ。

人によって生じ、遺され、継がれていく。それが熱だ。

自分の生はまだ止まらない。熱が、まだ絶えていないのだから。

灼けるような感覚が体に広がる。沸騰するような涙がこぼれる。

熱い。確かにそう感じた。

「帰ろう」

涙もぬぐわず、宣言した。

(川越宗一『熱源』より引用、一部改変)

## 語注

- ※ 白瀬南極探検隊 白瀬隊長を始め、武田学術部長、三井所衛生部長らが「極地突進隊」として、学術調査のために組織した探検隊。
- ※ 敏捷い 動作が素早いこと。
- ※ 咀嚼する 食べ物をよく噛んで味わうこと。
- ※ 逡巡する 決断が付かないためらうこと。
- ※ 凪ぐ 風が止んで静かになること。
- ※ 薙ぐ 横に打ち払って倒すこと。
- ※ チコピロー、キサラスイ 樺太の先住民であったアイヌが北海道の対雁村へ、国の都合により移住を余儀なくされ、その時のアイヌの頭領だったのがチコピローで、村一番の美女がキサラスイ。ヤヨマネクフはキサラスイと結婚するが、彼女を病で亡くしてしまう。
- ※ お前が連れて帰った息子の体の半分 妻のキサラスイの血が流れる息子を故郷の樺太へ連れて行った過去の話をことを指している。
- ※ つんつるてん 身長にくらべて、衣服の丈が短くて、足が出ているさま。
- ※ 紺 かすたように所々に小さな模様を出した、日常的に着ていた着物のこと
- ※ 石狩川 樺太アイヌの人々が最初に集団で連れてこられた土地。
- ※ 木幣 アイヌの宗教儀式で用いられる道具のひとつ。

問一 二重傍線部 a、e のカタカナを漢字に、漢字の読みはひらがなに直して答えなさい。

問二 空欄 A、E に入る語句を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度、使うことはできない)

ア きびきびと      イ がらがらと      ウ だらりと      エ ぱつりと      オ もこもこと

問三 傍線部 1 「快活な声は、どこか白々しい。」とあるが、「白々し」くになってしまう理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 南極点へ行けない落胆した気持ちを隠そうとしているのが見え透いているから。
- イ 南極点を目指した隊長として、最小限の被害で抑えたことを自負しているから。
- ウ 隊員の落ち込みに気付かない振りをすることで、敢えて悪役を引き受けていたから。
- エ アイヌを代表する一人として南極点到達を悲願としていたが、適わなかったから。
- オ 昼夜のない南極大陸にいて、疲労が蓄積した隊員たちを励まそうとしていたから。

問四 傍線部 2 「努めて静かに、ヤヨマネクフは聞いた」とあるが、なぜ敢えてそうしたと考えられるか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一度、氷の亀裂に落ちて死にかけたことがあったので、その無念を伝えたかったから。
- イ ひとりで南極点を目指そうとする気配に気付かれないようにする必要があったから。
- ウ 行けるものなら南極点へ行きたいという気持ちをどうしても抑えられなかったから。
- エ 辺り一面氷の世界にいたので方向感覚がすっかり失われ、正気を失いそうだったから。
- オ 親友のシラトカまでがあつさり断念したことに対して、殴ってしまいそうだったから。

問五 傍線部 3 「決まっている。南極点だ」と叫ぶヤヨマネクフの意図は何だったと考えられるか。文中の語句を抜き出し、後の説明文の空欄を、指定された字数でそれぞれ埋めなさい。(句読点は含まない)

ヤヨマネクフは「(1) 十三字」を作るために南極点に向かうのであって、白瀬隊のために向かうのではない。「島のアイス」がそのまま滅びてしまう前に、「(2) 八字」必要があったために、どうしても南極点到達を断念できなかつたと考えられる。

問六 傍線部 4 「いい加減にしろ、ヤヨマネクフ！」とシラトカがたしなめた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他国の探検隊が先に記録を打ち立てていたら、その行為は意味がないと考えたから。
- イ 隊の荷物を粗末に扱い、利己的な行動を取る親友に対して我慢できなくなつたから。
- ウ アイヌとして生き抜くことで、自分たちの存在意義は失われないと伝えたかったから。
- エ 自分の命を軽んじて、アイヌの誇りを忘れた親友の行動をひどく哀れに感じたから。
- オ 誰の手助けもなく南極点へ到達すると慢心する親友に裏切られたように感じたから。

問七 傍線部 5 「だからもう半分は、生きてやり抜け」とあるが、ここで言う「もう半分」とはどのようなことを指していると考えられるか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 村を作るために死んだ仲間のためにも、南極で新しい故郷を築くという約束のこと。
- イ 理想的な故郷を持つためには、世界を旅して良い土地を探すべきだという約束のこと。
- ウ 人が生きていく熱の源は故郷の思い出にあるため、それを忘れるなどという約束のこと。
- エ 「アイス」の存続は村にはなく、自分自身が生き抜くことにあるという約束のこと。
- オ 南極点を目指して死ぬのではなく、生き抜いて南極点から帰るべきという約束のこと。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次の文章は、京都の朝廷に宮仕えしている息子と、都から離れた土地、長岡で暮らす母との歌のやり取りが描かれた場面である。

むかし、おとこありけり。1 身はいやしな<sup>ア</sup>がら、母なむ<sup>※</sup>宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へ<sup>ア</sup>しければ、イ まうづとしけれど、しばしば<sup>2</sup> えまう<sup>エ</sup>でず。ひとつ子にさくありければ、いとかなしうし給ひけり。さらに、3 十二月ばかりに、4 とみのこととて御<sup>おほん</sup>ふみあり。ウ おどろきて見れば、歌あり。

参上シヨウトシタガ、ソノ度ニ

ヒトリツ子デモ

手紙

A 老いぬれば<sup>※</sup>さらぬ別れのありといへばいよいよ<sup>エ</sup>見まくほしき君かな  
かの子、いたう<sup>オ</sup>うち泣きて<sup>5</sup>よめる。

B 世の中にさらぬ別れのなくもがな<sup>6</sup>千世<sup>ちよ</sup>もといのる人の子のため  
ナカッタライイナア

(『新日本古典文学大系』17 伊勢物語』八十四段より引用、一部改変)

語注

- ※ 宮 天皇の娘で内親王に当たる。
- ※ さらぬ別れ 避けられない別れのこと。

問一 本文中にある次の語句の読みを、例にならって現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

(例) あうみ ↓ おうみ

- a 給ひ
- b まうづ
- c かなしう
- d 御<sup>おほん</sup>ふみ
- e いたう

問二 傍線部1「身はいやしな<sup>ア</sup>がら」、2「えまう<sup>エ</sup>でず」、4「とみの」、6「千世も」の現代語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

1 「身はいやしな<sup>ア</sup>がら」

- ア 性格がいやしいけれど
- イ 身なりがみすぼらしいけれど
- ウ 身内に問題があるけれど
- エ 身分が低いけれど
- オ 癒しを与えてくれるけれど

2 「えまう<sup>エ</sup>でず」

- ア 参上すべきだ
- イ 参上してもよい
- ウ 参上するつもりだ
- エ 参上したい
- オ 参上できない

4 「とみの」

- ア 豊富な
- イ 驚きの
- ウ 急ぎの
- エ 十枚の
- オ 裕福な

6 「千世も」

- ア 千人も
- イ 千日も
- ウ 千年も
- エ 千回も
- オ 千の家族も



問三 二重傍線部ア～オの動詞のうち、主語が異なる動詞を一つ選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部3について、次の問いに答えなさい。

(1) 「十二月」の月の異名を現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

(2) 月の異名「如月」は、何月を表しているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一月 イ 二月 ウ 三月 エ 四月 オ 五月

問五 Aの和歌の内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あなたと一緒に年を取って、死ぬまで離れたくない。  
イ 老いて死に分かれる前に、ますますあなたに会いたい。  
ウ 別れるつらさを味わいたくないので、あなたに会わない。  
エ 老いを迎えたが、死ぬのはまだまだ先のことであってほしい。  
オ 会わないうちに、お互いずいぶん歳を重ねてしまった。

問六 傍線部5「よめる」の後に省略されている語を、漢字一字で本文から抜き出して答えなさい。

問七 Bの和歌を含めて、『伊勢物語』の今回の話について話し合う生徒の会話の空欄に当てはまる語句を、本文からそれぞれ抜き出して答えなさい。ただし、( )の条件に従うこと。

生徒A 「『伊勢物語』は平安時代に書かれたと言われているけれど、その時代と今の時代とでは、母と子の関係は大きく違っているのかな。」

生徒B 「この文章では、『母』は『子』に会えないことを、とても悲しんでいるわね。その上、(1)四字( )であることが余計に悲しくさせているのね。」

生徒A 「そうだね。でも逆に、『別れ』とあるけれど、『おとこ』は母親に会いたくなかったんだよね？」

生徒B 「いいえ、違うと思う。だって、『おとこ』は(2)五字( )がないことを願っているんだよ。」

生徒A 「そうか、だから『母』の(3)十三字( )という言葉に感極まって涙があふれたんだね。」

生徒B 「母と子の関係は、この時代から今も何も変わらないのね。」

※印の空欄は記入しないこと

一	問一	a		b		c	り	d		い	e
	問二	A		B		C					
	問三										
	問四										
	問五										ことを良しとする考え方
	問六										
	問七	①		②		③		④		⑤	

得点
※
点

※
※

二	問一	a		b		c		d	ました	e
	問二	A		B		C		D		E
	問三									
	問四									
	問五	(1)								
	問六	(2)								
	問七									

※
※

三	問一	a		b		c		d		e
	問二	1		2		4		6		
	問三									
	問四	(1)		(2)						
	問五									
	問六									
	問七	(1)		(2)						

※
※

受験番号
------

◎受験番号を上  
の空欄  
に記入すること

※印の空欄は記入しないこと

すべて  
2点

得点  
※  
点

一	問一	a	しぎ	b	出版	c	誤り	d	かんちがい	e	指摘	
	問二	A	ウ	B	オ	C	イ					
	問三		オ									
	問四		ア									
	問五		何でも個人で所有する					ことを良しとする考え方				
	問六		エ									
	問七	①	×	②	○	③	○	④	×	⑤	○	

※  
※

二	問一	a	といぎ	b	苦渋	c	たづな	d	絡ませた	e	衝撃	
	問二	A	オ	B	エ	C	ア	D	イ	E	ウ	
	問三		ア									
	問四		イ									
	問五	(1)	アイヌとして生きられる故郷									
		(2)	世界に認められる									
	問六		ウ									
問七		エ										

※  
※

三	問一	a	もうず	b	たまい	c	かなしゅう	d	おおんふみ	e	いとう
	問二	1	エ	2	オ	4	ウ	6	ウ		
	問三		エ								
	問四	(1)	しわす		(2)	イ					
			イ								
	問六		歌								
	問七	(1)	ひとつ子				(2)	さらぬ別れ			
(3)		いよいよ見まくほしき君かな									

※  
※

受験番号

◎受験番号を上  
の空欄  
に記入すること